

# *Tess of the d'Urbervilles* の中の バラッド

—全9編の研究—

近藤和子

## Abstract

One of the reasons why Thomas Hardy (1840-1928) was out of step with many of his contemporaries is that he was a great lover of ballads. His biography, *The Life of Thomas Hardy*, shows how he was raised in a ballad-like atmosphere. Consequently, ballad characteristics pervade much of his work. However, little criticism in the field has been published until now.

This paper is an attempt to fill in the void, focusing on the nine ballads cited in *Tess of the d'Urbervilles* (1891). A few lines in the novel concern five ballads, while other ballads are mentioned only by name without reference to their content. The stories of these ballads have not been adequately analyzed in any of the available research literature, even though story-telling is an essential element of the ballad. This research shows that all the ballads mentioned in the novel, with one exception, were chosen from those sung by villagers around Dorset where Hardy grew up.

The nine ballads are woven into the plot intentionally and help to mold the characters more completely into their circumstances. Moreover, some of the ballads foreshadow later developments in the story. Although these ballads have been generally disregarded by literary scholars, this paper shows how they play a significant role in the formation of *Tess of the d'Urbervilles*.

## はじめに

Thomas Hardy (1840-1928) は英文学史上、類まれな多作家の一人で、50編を超す短編小説、14巻の長編小説、900余編の詩、1編ずつの詩劇と叙事

詩を創作している。これらの作品には詩に限らず小説においても伝承バラッドの影響が色濃く見られ、“... Hardy had relied for most of his success on the ballads.”<sup>1</sup>と彼の文学的成功はバラッドの伝統に負うところが大きい、と指摘されている。Hardy の二度目の妻 Florence Emily Hardy (1879-1937) が書いた *The Life of Thomas Hardy* 『ハーディ伝』<sup>2</sup> には、幼少の頃から音楽に親しみ日常的に歌われていたバラッドを耳にしていたこと、村人たちから聞いた様々な民間伝承や噂話を書き留めていたことなど、バラッド的環境で育った彼の様子が詳細に記述されている。そこから浮かび上がってくるのは、いかに彼が“folklore”や“ballad”<sup>3</sup>に関心をもち、それらを創作の原点にして彼独自の世界を展開しているか、ということである。

後期の代表作の一つ、*Tess of the d'Urbervilles* (以下、『テス』または「小説」とする) は、その内容の是非を巡って出版社との間で紆余曲折の末、1891年に出版された。この小説には登場人物たちが口にするバラッドの内容や、伝承バラッドまたはブロードサイド・バラッド<sup>4</sup>のタイトルそのものが断片的に記述されている個所がある。しかし筆者は今日までそれらの挿入に意味があるのかどうかを意識しないまま読み過してきた。筆者が知る限り、Hardy の作品をバラッドの視点から論じている著書や論文は少なく<sup>5</sup>、『テス』においても同様である。本研究は、この小説の中に挿入されている9編全てのバラッドの内容や背景について調べ、プロットと関係があるのかどうか、また作者 Hardy がこれらを挿入した意図についても考察することを目的とする。

## 1

7局面59章で構成された『テス』の中には、バラッドのタイトルとその作品の2行が挿入されたものが2編 (“The Spotted Cow” と “The Ballad of the Mystic Robe”)、タイトルとその1節が挿入されたものが1編 (“The

break o'the day”）、単にタイトルの記述だけのものが4編 (“Cupid's Garden”, “I have parks, I have hounds”, “The Tailor's Breeches” と “Such a beauty I did grow”)、タイトルは不明であるが「登場人物たちが、このような内容のバラッドを口ずさんだ」と2、3行の説明があるものが2編 (ch.14と ch.17) 挿入されている。しかしこのような断片的な記述ではそれぞれの作品の内容は分からない。バラッドではその物語性が重要な要素の一つであるから、これら9編の作品の内容を調べる必要があったが、次のような資料を入手することができた。

イギリスの traditional song の収集家、Henry E. D. Hammond と George Gardiner の2人が中心となり、1905年から1909年の間に Hardy の故郷、Dorset 州を中心に彼と同時代の人々から聞き取った歌を記録し、*Folk-Song Society's Journal in 1907* や *Folk-Songs in England* として出版している。これらは現在、London の Vaughan William Memorial Library に所蔵され、“Hammond & Gardiner MSS”<sup>6</sup> としてデータベース化されていることが分かった。それによると、彼らがイギリス南部の6州で収集した約900曲の folksong のうち、764曲は Dorset 州で収集されている。その中から Hardy の作品に挿入されている21編が “Songs of Thomas Hardy's Wessex”<sup>7</sup> としてCD化されている。これらはその出典が明確であるから、Hardy の作品中のバラッドや歌の研究には不可欠な資料として利用できる。以下、『テス』に挿入されている9編の作品を小説のストーリーに沿って順に挙げ、登場人物やプロットとの関係について考察する。

## 2

『テス』の粗筋は次の通りである。貧しい家庭に育ったヒロインのテス (Tess d'Urberville) は、奉公先の放蕩息子アレック (Alec d'Urberville) に犯され、やがて産まれた子供を亡くす。その後、真の恋人エンジェル (Angel Clare) に出会って結婚するが、アレックとの関係が原因で捨てられる。苦

難の末、テスは夫との再会を果たすが、時すでに遅く、アレック殺害の罪で絞首刑に処せられる。このような実に単純明快なストーリーである。

Hardy の作品はその書き出しに重要な意味があるが、『テス』も例外ではない。イギリス南部を舞台とする冒頭から読者は遠い過去、古代 Wessex 王国があった頃、即ち口承歌が本来の姿で歌われていた頃へと誘われる。牧師から先祖が名門のダーバヴィル家であると聞かされ、有頂天になった父親の様子に落胆したテスが家に帰ると、母親はバラッドを歌いながら揺り籠を揺らし且つ洗濯をしていた。テスの母親は「迷信、民間伝承、方言、口承のバラッドなど滅びつつあるがらくたを抱えており、テスとは200年の差がある」<sup>8</sup>と紹介されているように、バラッドの世界の住人である。彼女がその時に歌っていたのは、お気に入りの“The Spotted Cow” (Hammond & Gardiner MSS, S.4)<sup>9</sup> (4行7節) で、挿入の2行は “I saw her lie do’ — own in yon’ — der green gro’ — ve; / Come, love!’ and I’ll tell’ you where!”

(ch.3)「向こうの緑の森で 寝ていた牝牛を 見かけたよ / ねえ おいでよ! そしたらどこか 教えてあげる!」となっている。「まだら牛の行方を捜していた娘を男が森に誘い込み、処女を奪う。しかし娘はまた牛を捜す振りをして、僕を誘うだろう」という内容で、「緑の森での処女喪失」がテーマの典型的なバラッドの一つである。この作品は『テス』の中で最初に登場するバラッドであるが、見過ごせない重要な役割を担っている。即ち、やがてテスの身に降りかかる不幸、太古の Chase の森での処女喪失を暗示しているのである。

伝承バラッドでは、「花、特にバラを摘む行為は妖精の怒りを買うのでタブーである」<sup>10</sup>が、テスは偽ダーバヴィル家の庭園でそれを犯す。その結果、Chase の森でその家の息子、アレックに処女を奪われ、やがて妊娠、出産し、17歳の girl-mother となる。家族の生活を支えるために小麦の収穫作業に携わっていたテスに、「仕事仲間の女たちはからかい半分にバラッドを歌った」、と次のような描写がある。

... they (female companies) could not refrain from mischievously throwing in a few verses of the ballad about the maid who went to the merry green wood and came back a changed state. (ch.14) (Italics mine)

これは当時歌われていたどのバラッドを指すのだろうか。緑の森での処女喪失をテーマにしたバラッドは“The Spotted Cow”を含め、テスは日頃しばしば耳にしていたから自分の身に降りかかった不幸と重ね合わせることはなかったであろうし、Hardy自身も周辺で歌われていた数編の作品を知っていたと推測できる。例えばマザーグースの“The Milk Maid”, H&G MSS 中の“Down by the Woods and Shady Green Trees” (D. 719), “Pretty Betsy the Milkmaid” (D.247), “Catch-Me-If-You-Can” (D.564)<sup>11</sup>などが挙げられる。初めの4編は単に処女喪失を歌ったものであるが、“Catch-Me-If-You-Can”の次の2節は他とは異なる状況描写をしている。

When 6 long months went over and past  
 The fair maid she grew thick round the waist  
 I see those shady bowers  
 I see those shady bowers st.5

When 9 long months were over and gone  
 This young maid bore a beautiful son  
 But then there was no father  
 But then there was no father st.6

実にリアルな表現である。これらのフレーズをことさら強調して歌った仕事仲間の女たち、そしてそれを聞いて赤面したであろうテスが想像される。従って Hardy は、同じテーマをもつ数編のバラッドの中から、敢てこの“Catch-Me-If-You-Can” (4行9節) を選択したのではないかと推測さ

れる。このバラッドは当時 Dorset 地方で歌われていた伝承歌の中の 1 編であるが、テスの処女喪失、妊娠、出産そのものを歌った内容で、「男が乳搾りの娘を森に誘い、やがて娘のお腹は大きくなり、子供が産まれるものの、父親は行方不明。男を捜し出して名前を聞くと、『できるものなら掴まえろ』が自分の名前だとうそぶく。」となっている。未婚の母として苦悩するテスをこのバラッドを歌って冷やかしながらも温かく見守っている彼女たちの優しさは、Hardy のテスへの擁護そのものでもある。

やがて赤ん坊を亡くしたテスは、酪農場で乳搾りとして働き始める。少しずつ気持ちに余裕が出てきて、自分を励ますためにいくつかのバラッドを歌って希望を持つとするが、それらは自分の気持ちにぴったり沿うものではなかった。（“She tried several ballads, but found them inadequate...” ch.16）ある日のこと、乳の出が悪い牛がいた。その時の様子は次のように記述されている。

Songs were often resorted to in dairies hereabout as an enticement to the cows when they showed signs of withholding their usual yield; and the band of milkers at this request burst into melody...they (milkers) had gone through *fourteen or fifteen verses of a cheerful ballad about a murderer who was afraid to go to bed in the dark because he saw certain brimstone flames around him...*<sup>12</sup> (ch.17) (Italics mine)

このバラッドは H&G MSS の中の “The Prentice Boy” (D.188)（8 行と 4 行混合の 8 節であるが、8 行を 4 行に分けると 14 節となり、上記引用の *fourteen or fifteen verses* と一致する）と推測される。ストーリーは「奉公人の男が娘を森に誘い込んで殺すが、主人に手や顔についた血を咎められ、鼻血だと言いつれ逃れる。しかし床についても地獄の炎が怖くて眠れない。やがて川に浮かぶ娘の死体が発見され、男は絞首刑になるのではないかと怯える。」

となっている。テスとエンジェルが愛し合い、この小説で唯一安らげる牧歌的な情景が繰り広げられるこの場面で、乳搾りたちはこの残酷なバラッドを実に陽気に歌って牛の乳の出を促した。音楽を好むとされる牛の話もこの場面で民話風に語られ、バラッドの雰囲気盛り上げている。挿入9編の作品の中で tragic で cruel なバラッドはこの1編だけであるが、ストーリーには頓着せずにバラッドそのものを cheerful に楽しんで歌っていた人々(民衆)の様子が窺える。相手を殺害した結果、絞首刑に処せられるという内容は、この小説のプロットと深く関連している。即ち、『テス』の最終場面の伏線として物語の前半でこのバラッドの一部分のみが紹介されているが、その全容が分かった後で、読者は Hardy の挿入の意図の大きさに初めて気付かされる。『テス』のクライマックスでもある最終場面は、テスがアレックを殺害し、その結果、絞首刑に処せられる、という意外な展開で物語が終わっているからである。

20歳になったテスは、結婚式の前にエンジェルから贈られた花嫁衣裳を羽織ってみる。そのとき彼女の脳裏に浮かんだのは、“That never would become that wife / That had once done amiss,” (ch.32) 即ち、「一度過ちを犯した妻に、それは決して似合わぬ」という歌詞である。これは母親の愛唱歌“The Ballad of the Mystic Robe”「不思議な上着のバラッド」の一部で、Thomas Percy 編纂の *Reliques of Ancient English Poetry* 『英国古謡拾遺』(以下、*Reliques* と略す) の1番, vol. 3, “The Boy and the Mantle” (4行と6行混合の45節)、あるいは Francis James Child 教授編纂の *The English and Scottish Popular Ballads* 『英蘇バラッド集』(以下、*ESPB* と略す) の29番 “The Boy and the Mantle” 「少年とマント」(4行45節)からの引用である。「一度身を持ち崩した女がその衣裳を着れば、忽ち色が変わり、不貞が露見する。」という中世の民間伝承を元にしたこのバラッドに、テスは我が身を振り返って不安の色を隠せなかった。エンジェルとの結婚の破綻を暗示して、このバラッドの挿入も効果的である。

*Reliques* と *ESPB* の歌詞は “Itt shall neuer (never) become that wiffe / That hath once done amisse” (st.8) と記されておりほぼ同じであるが、母親が歌っていた挿入の2行とは若干の違いがある。これは伝承の過程での歌詞の変化を物語る一例である。ただ、吟遊詩人が歌っていたとされる45節もの長いバラッドを「母親は日頃、子供のテスに歌い聞かせていた」(ch.32) と説明されているが、この作品は H&G MSS の中には存在しない。つまりテスの母親が歌っていたものは、Hardy の故郷 Dorset 州でよく歌われていたバラッドではなかったということである。しかし Hardy 自身は *Reliques* と *ESPB* の両方を持っていたので、これらの著書の中からこの伝承バラッドを引用し、それを周知している知識層の読者を想定して、意図的にプロットの網目に織り込んだと考えられる。

## 3

49章では5編のバラッドが纏めて挿入されている。この場面では、テスはエンジェルが好きだったバラッドを歌い、過酷な労働に耐えながらその帰りを待つ。先ず “Cupid’s Garden” (D.370) (8行5節) は、「花を眺めながら庭園を散歩していた水夫が、二人の娘 (... one was lovely Nancy so beautiful and fair / The other was a virgin... st.2) に出会って声をかける。二人を比べた彼は、美人で可愛いナンシーよりも処女だと答えた方の娘に魅かれて結婚の約束をする。そして、戦いに行っている間も僕のことだけを思って待っていておくれ。」という内容となっている。露呈されたこの男の女性観は、あくまでもテスの処女性を重視してそれに拘り続けたエンジェルの保守的な結婚観と密接に結びつく、ということである。彼が好んだもう1編は “I have parks, I have hounds” である。これは Hampshire 州の Portsmouth で収集された “Come All Jolly Fellows” (H.912) (8行2節) を指す。“Come all jolly fellows that loves to be mellow / Attend unto me and sit easy...” と始り、「僕には、猟園、猟犬、畑、



土地がある。お陰で食糧は十分あり、こうして皆に振る舞える僕は幸せだ。さあ、皆、飲んで歌って乾杯しよう！」と収穫の喜びを共に分かち合う、といった内容が陽気なメロディに乗って歌われている。Hardy はリフレイン、“I have parks, I have hounds, / I have fields, I have grounds...”の一部をこの歌のタイトルにしているが、耳から聞いて覚えたもので、実際のタイトルを知らなかったのであろうか。エンジェルは牧師の父や兄たちを嫌い、古い体質の実家を飛び出し、農業経営者になる夢をもっていた。このバラッドからは、近い将来、豊かな自然の中で理想的な暮らしをしている筈の自分の姿と重ね合わせて歌っていたであろうエンジェルの農業への強い思いが読み取れる。

次に彼が嫌ったバラッドは2編あるが、その1編は“The Tailor’s Breeches” (D.238) (8行5節)である。「酒と女と仲間をこよなく愛する仕立屋が、酔った勢いで面白半分には娘のペチコート借りて踊り始める。しかしその隙に、目当ての娘に貴重品は盗られ、半ズボンも返してもらえず、下着姿の哀れな様を笑われる。」という下品で滑稽な内容のブロードサイド・バラッドである。もう1編は“Such a beauty I did grow” (Thomas Hardy His Book), (Wr.303) (4行6節)で、内容は「少年の生来の可愛さは母親の自慢の種で、それは誰もが認めるところであった。やがて美男へと成長するにつれ、知性もしっかり備わった」と内面外面全てを自画自賛する鼻もちならない男についての歌である。この2編を嫌ったエンジェルであるが、実は高慢そのものである彼の内面性が浮き彫りにされる内容となっている。このようにそれぞれの作品の内容を確認してみると、この4編のタイトル名だけのバラッドの中に、直接には描写されていないエンジェルの人物像の一端が隠されていることが判明する。

『テス』の中で引用されている最後の1編は“The break o’ the day” (D.779) (8行4節)で、テスは涙を流しながらこの ditty (小唄) を歌う。

Arise, arise, arise!	起きよ さあ 起きよ!
And pick your love a posy,	庭に咲く 美しき花
All o' the sweetest flowers	みんな 摘み
That in the garden grow	いとしき人に 花束を
The turtle doves and sma' birds	枝から枝へ 巣をかける
In every bough a-building,	きじ鳩や 小鳥たち
So early in the May-time,	五月 初めの
At the break o'the day!	この 朝ぼらけ!

(筆者訳)

牧歌的な情景の中で、恋人を思う気持ちが長閑に歌われているが、この歌には結末の異なる2種類のヴァージョンがある。下記の左側が Hardy 自身が収集した“Old Song sung at Melbury Osmond about 1820”の中から、右側が“H&G MSS (D.779)”からの引用である。

So then he played it over	O why should my true love
All on the pipes of ivory	be banished from me
So early in the morning	Or if he should die
At the break o'the day!	I shall never see him more

Hardy の引用の方は「恋人が吹くフルートの音が、朝ぼらけの中に緩やかに流れる情景」で終わり、一方は「恋人たちの悲しい別れ」を暗示して終わる。両方のヴァージョンが Dorsret 州に流布していたが、Hardy が穏やかな内容の方を選択した意図を探ってみよう。“The break o'the day”の歌詞の挿入は、全9編の内、最も長い8行1節にも及ぶ。この長さからも彼のこの歌への思い入れの深さが推測されよう。エンジェルの帰りをひたすら待ち望む過酷な状況の中のテスが歌詞に思いを託し、ほんの一瞬でも気持が安らぐことを願ったのではないだろうか。しかしその思いも空しく、他の歌も含め「素朴な他愛のない歌詞は、歌い手の疼く心を嘲笑うかのように響いた」<sup>13</sup>と説明され、テスの苦悩の深さを更に浮き彫りにする結果となっている。

Hardy はこれら 5 編の作品を “excellent ditties” と称賛しているが、エンジェルが嫌った 2 編は “excellent” とは形容できない質の低いブロードサイド・バラッドである。Hardy は同じ作品を次の行では “ballads” と記しており、これは彼が『歌』の分類は特にしない<sup>14</sup>と表明していることを例証しているが、作品を研究する上では区別する必要がある。因みに、挿入 9 編のバラッドの中で “The break o’the day” のみが “ditty” で、他は全て “ballad” である。

ここに纏めて 5 編を挿入した Hardy の意図は、簡潔には次のように述べられよう。先ずエンジェルの人物像を補強すること、次に Hardy 自身のテスへの慈悲の思いを歌に託して表現すること、さらには消滅しつつあった “living ballad” をせめてタイトルだけでも『テス』の中に記録してその存在を留めておくこと、この 3 点ではないだろうか。鉄道の発達と共に片田舎 Dorchester にも時代の新風が吹き込み始め、やがて忘れられ、廃れてゆくであろう「古きもの」への愛着の念を Hardy は次のように記している。

... village tradition — a vast mass of unwritten folk-lore, local chronicle, local topography, and nomenclature — is absolutely sinking, has nearly sunk, into eternal oblivion... there is no continuity of information, the names, stories, and relics of one place being speedily forgotten under the incoming facts of the next.<sup>15</sup>

以上、『テス』の中で直接、間接的に “ballad” と “ditty” が言及されているのは、この 49 章までである。

### 結び

挿入全 9 編の作品は、イギリス南部の Dorset 州、Somerset 州、Hampshire 州、Worcestershire 州の村人たちや吟遊詩人により、実際に

歌われていた数多くのバラッドや小唄などの中から適切に選択されていた。これらの内容を詳細に調べる前は、『テス』のストーリーやプロットと関連があるとは想像すらできなかった。しかし、プロットの網目に深く入り込んだバラッドはストーリーと密接な関係を保ち、各場面の状況を設定し、その展開を前面に強く押し進めたり、また人物造型上の補助的役割も担っていることが判明した。

バラッドの背後に悲喜劇的な人間の真実があることを知っていた Hardy は、この小説の第5版の序文で「現実の底にある世界の真実を一つの『印象』として読者の耳に残すこと」<sup>16</sup>と述べている。これは“ballad”を意識しての表明であり、散文と韻文の間に境界線を引かない Hardy は、当初からこの小説を“prose-ballad”に仕上げる構想を持っていた。

『テス』は簡単に言えば、誘惑に始まり、殺人で終わるセンセーショナルな小説である。その中にバラッドのモチーフである、誘惑、処女喪失、子供の死、乳搾りの夫の逃亡、捨てられた女の苦悩、復讐、殺人、絞首刑などを全編に内在させ、さらにフォークロアなどを随所に効果的に織り込み、バラッドの世界を拡大している。作品構成面からもバラッドの要素の基本的な形式や技法（突然の幕開け、対照法、省略法、リフレインなど）、また叙事的、悲劇的、抒情的、アイロニカルなどの語りの様式もバラッドの伝統に則して意識的に組み込まれている。Hardy は『テス』の中に、伝承とブロードサイド両方のバラッドを挿入し、小説全体をバラッド固有の要素で満たした。そして典型的なバラッド・ヒロインのテスの悲劇を、散文でありながら韻文の印象を与える新しい形の1編の“literary ballad”, *Tess of the d'Urbervilles* として抒情的に歌い上げたと言えよう。<sup>17</sup>

#### 註

本稿は、日本バラッド協会第3回会合（2010年3月28日、於京都大学）でのシンポジウム「小説の中のバラッド — ルイス、シェリー、ハーディ、カシュナーはどのよ

うにバラッドを使ったかー」のパネリストの一人として、ハーディ担当用に準備した原稿に加筆したものである。

テキストは Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*. London: Macmillan, 1960. を使用。

- 1 Blunden, Edmund. *Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1942, 103
- 2 Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1965. (1st ed., 1930)
- 3 “Ballad” という語は、ラテン語の “ballare” (to dance) を意味し、もともとダンスに合わせて歌われた歌を指していた。その後、ヨーロッパ各地で歌い継がれてきた多種多様な口承物語詩を指すようになった。“Ballad” の定義は学者により様々で、未だに統一されたものはない。*The English and Scottish Popular Ballads* 10巻本を1本 (selection) に纏めた G. L. Kittredge は、“A BALLAD is a song that tells a story, or — to take the other point of view — a story told in song. More formally, it may be defined as a short narrative poem, adapted for singing, simple in plot and metrical structure, divided into stanzas, and characterized by complete impersonality so far as the author or singer is concerned.” と定義している。

G. Malcolm Laws, Jr., *The British Literary Ballad: A Study in Poetic Imitation* (Southern Illinois UP, 1972), xi も参照されたい。

- 4 長い年月をかけて歌い継がれてきた伝承バラッドに対する新しいタイプのバラッドを指す。15世紀後半の印刷術の発達により、「ブロードシート」(broadsheet) と呼ばれる大判紙に俗謡や社会的事件などが片面に印刷され、路上で歌われたり売られたりした。この印刷された大判紙の名前から、この種のバラッド (俗謡) は「ブロードサイド・バラッド」(broadside ballad) と呼ばれるが、伝承バラッドに比べて粗雑な内容のものが多い。
- 5 Hardy の作品とバラッドとの関係についての論文と著書は、下記の3編が主要なものであろう。
  - 1) Davidson, Donald. “The Traditional Basis of Thomas Hardy’s Fiction”, *The Southern Review*, Vol.1. Baton Rouge: Univ. of London Press, 1940-41.
  - 2) Gunn, Thom. “Hardy and the Ballads”. D. Davie ed. *Agenda*, Thomas Hardy Special Issue, 1972.
  - 3) Brown, Douglas. *Thomas Hardy*. London: Longman, 1961.  
Cf. “The Uniqueness of His Art” in Part II: Novels and Stories

## “The Harvest of the Novels” in Part III: Poems

- 6 Cf. <http://library.ehdss.org/archives/>
- 7 Saydisc Records, England, 1995.
- 8 “Between the mother, with her fast-perishing lumber of superstitions, folk-lore, dialect, and orally transmitted ballads, and the daughter... there was a gap of two hundred years as ordinarily understood.” (ch.3)
- 9 バラッド名の後の括弧内は、その収集場所と通し番号を示す。以下、“Hammond & Gardiner MSS” は省略し、“Cupid’s Garden” (D.370) のように記す。因みに、D は Dorset 州、S は Somerset 州、H は Hampshire 州、Wr. は Worcestershire 州の略である。
- 10 Cf. “Tam Lin” (No.39) in *The English and Scottish Popular Ballads*, Vol.1.

She had na pu’d a double rose,  
 A rose but only twa  
 Till up then started young Tam Lin,  
 Says, Lady, thou’s put nae mae. st.5

お転婆娘のジャネットは、「緑のマントか処女を奪われるから行くな」と禁じられていたカーターホーへ出かけ、そこでバラを摘んでいた。するとタム・リンという妖精の若者が現れて、それを咎める。バラは妖精たちの特別な保護の元にある花で、それを摘むと妖精の怒りを買うと信じられていた。その為にジャネットはタム・リンに処女を奪われた。

- 11 Cf. Jackson-Houlston, Caroline. “Thomas Hardy’s Use of Traditional Song”, *Nineteenth-Century Literature*, Vol.44, No.3 (Univ. of California Press, Dec., 1989, 323
- 12 この箇所は次のように歌われている。

I wistfully looked on him (master)  
 but very little said  
 I called for a candle  
 to light myself to bed  
 And all of that long night  
 no comfort could I find  
 For the burning flames of torment  
 before my eyes did shine st.6

- 13 “. . . and the simple silly words of the songs resounding in painful mockery of the aching heart of the singer!” (ch.49)

- 14 ハーディは、「“ballad”, “lyric”, “narrative” に関して、特に区別はしない」と述べている。Cf. *The Life of Thomas Hardy*, 359
- 15 Hardy, Florence Emily. 312-3
- 16 “Let me repeat that a novel is an impression, not an argument; and there the matter must rest. . . .”
- 17 小説『ダーバヴィル家のテス』の全体像をバラッドの視点から論ずる必要があるが、本稿では紙数の都合上、割愛する。

## 参考文献

- Blunden, Edmund. *Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1942.
- Brown, Douglas. *Thomas Hardy*. London: Longman, 1961.
- Child, Francis James ed.. *The English and Scottish popular Ballads*, Vol.5. New York: Dover Publication, Inc. Mineola, Rev. ed. 1965.
- Davidson, Donald. “The Traditional Basis of Thomas Hardy’s Fiction”, *The Southern Review*, Vol.1. Baton Rouge: Univ. of London Press, 1940-41.
- Firor, Ruth A.. *Folkways in Thomas Hardy*. New York: Russell and Russell, 1968.
- Friedman, Albert B.. *The Ballad Revival*. Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1961.
- Gunn, Thom. “Hardy and the Ballads”, D. Davie ed. *Agenda*, Thomas Hardy Special Issue, 1972.
- Hynes, Samuel. *The Pattern of Hardy’s Poetry*. North Carolina: The Univ. of North Carolina Press, 1961.
- Jackson-Houlston, Caroline. “Thomas Hardy’s Use of Traditional Song”, *Nineteenth Century Literature*, Vol.44, No.3. Univ. of California Press, 1989.
- Kittredge, George Lyman and Sargent, Helen Child ed. *English and Scottish Popular Ballads*. Boston: Houghton Mifflin, 1904.
- Lewis, C. D.. *The Lyrical Impulse*. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1955.
- Opie, Iona and Peter. *The Oxford Nursery Rhyme Book*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1955.
- Percy, Thomas ed.. *Reliques of Ancient English Poetry*, Vol.3. New York: Dover Publications, Inc., 1966. (1st ed., 1756)
- Sharp, Cecil J. ed.. *One Hundred English Folksongs*. New York: Dover

Publications, Inc., 1975.

バラッド研究会編訳『チャイルド・バラッド全3巻』（東京、音羽書房鶴見書店、  
2005-2006）

井出弘之『ハーディ文学は何処から来たか』（東京、音羽書房鶴見書店、2009）

茂木 健『バラッドの世界』（東京、春秋社、1996）

山中光義『バラッド鑑賞』（東京、音羽書房鶴見書店、1988）

山中光義『バラッド詩学』（東京、音羽書房鶴見書店、2009）